

王妃エンマとアングロ・サクソン王朝最後の王たち

小林 絢子

ウェスト・サクソン王エグバート⁽¹⁾ (在位829-37: アルフレッド大王の祖父) 以来確立したアングロ・サクソン系の王朝には、デーン人やヴァイキングによる脅威が長い間、再三にわたって続いていた。この不安定なアングロ・サクソン系王朝と一時王位に割り込んできたデーン系王朝の両者を抑えて、ノルマン系王朝を誕生させたのが、ウィリアム征服王である。それ以後のイギリス王家を確立させたのであるから、ウィリアム征服王による「ノルマン征服」の意義は大きい。

この征服を可能にしたのが、ノルマン公国の公女であるエンマの結婚である。彼女ははじめ英国王エゼルレッド (在位978-1016) と結婚し、後のエドワード懺悔王を生み、次にデーン人で英国王となったクヌートと結婚して、後に短期間ではあるがこれまた英国王となったハーディカヌートを生んだ。そして彼女は、のちに詳述するようにノルマン王朝の始祖であるウィリアム1世 (在位1066-1087) の血縁なのである。

エンマのように2人の王の王妃となるということは珍しいことではあるが他に例がないことはない。アリエノール・ダキテーヌはフランス王ルイ7世 (在位1137-80) と離婚して英国王ヘンリー2世 (在位1154-84) と再婚した。リチャード獅子王をはじめとする多勢の王子たちとの葛藤など波乱に満ちた生涯で後世の人々の関心を集め、日本でも最近石井美樹子著「王妃エリエノール」⁽²⁾などが出版されたり、「冬のライオン」(イギリス映画 1968年) が上映されたりしている。それに比べてエンマの場合は、時代も古いし、彼女自身もアリエノールのような強大なフランスの公国の女

相続人ではないので、その結婚にドラマ性は薄い。しかし、そのことは逆にエンマは1人の女性として運命に翻弄される度合いが大きかったといえるのではないだろうか。エンマが夫である英国王2人と、また英国王となった2人の息子と、さらにはこれまた英国王となった継息子と、どのように関わって、アングロ・サクソン最後の王朝期を乗り切ったのかということを見ていくことが本論の主題である。

先に述べたようにノルマン王朝確立以前の英国王たちは代々デーン人の来襲に悩まされていた。アルフレッド大王の生まれる約100年前の787年に3艘の竜骨舟がドーセットに現れて以来、リンディスファーンの僧院をはじめとして英国は北方から次々と彼らに荒らされた。アルフレッドの祖父、父のみならず兄たちも皆デーン人との戦いに生涯を費やしている。孫のアゼルスタン（在位905-40）がようやくデーン人の治外法権であったデーンロウを奪回して英国の統一をなしとげたが、まだその急襲は止まず、アゼルスタンの弟エドマンド、エドレッドの短い治世でも続き、エドマンドの息子エドガ（在位959-75）の時代に至ってようやくその嵐は少し収まった。おかげでエドガは「平和王」という愛称をもらっている。

エドガの息子のエゼルレツドがエンマと結婚したのであるが、この人はIll-AdvisedとかUnready（無思慮王）という有難くない愛称を奉られている。彼は個人としては特に無能ということにはなかつたのであろうが、側近に左右されやすく、デーン人の再来を許し、国内のゴドウィン家の台頭を抑えられずに国内を混乱におとしいれたまま没したからであろう。

平和王エドガが没した時、長子エドワードが後を継いだ。彼は3年間（975-8）王位についた後、何者かによって刺殺された。⁽³⁾ 異母弟エーゼルレツドはまだ7歳にもなっていなかったといわれるが、惨劇の場所が彼と母アルフトリスの館であったため、彼の即位は疑惑の目で見られたらしい。幼年王としての彼は当時人々から敬愛されていたダグスタンから聖別を受けたこともあり、一応の支持を地方の領主たちからも得て、サザンプトン、ポートランド、更にサマーセットなどへのデーン人の来襲を切り抜けてい

たようである。しかし、991年のモールドンの戦いでエセックスのビュルフトノースが英雄的に戦死して以来、エーゼルレッドはデーングルドと呼ばれる平和金を払ってデー人からの難を避けるようになった。その額ははじめは1万ポンドだったが、994年には1.6万ポンド、998年2.4万ポンド、1006年3.6万ポンド、1011年4.8万ポンドと増していった。⁽⁴⁾ これらは主として襲われた地方の住民から上納され、ひいては英国の財政を逼迫させた。

エーゼルレッドはその頃(980年頃)までにエルフイフという女性と結婚していたらしい。度重なるデー人の来襲は平和金ばかりでなく他のあらゆる手段を使ってでも阻止せねばならぬものであった。エルフイフの間には後に剛勇王(Ironside)として知られるようになるエドマンドをはじめとする沢山の子女⁽⁵⁾がいたにもかかわらず、彼女を遠ざけて、ノルマン公の娘エンマと再婚したのである。当時デー人は英国来襲時の備品や食料を調達する寄港地としてノルマン地方の海港を利用していた。エーゼルレッドとしてはノルマン公国と組んで防衛線を張る必要があった。⁽⁶⁾ ノルマン公リチャール2世は家系としてはヴァイキングの子孫であったし、当時英国を襲撃していた非常に強大なデー人の王スヴェンを恐れていたので、エーゼルレッドと自分の妹エンマを結婚させることにためらいを見せたといわれるが、エーゼルレッドからエンマへの結納用の土地(エクセター、ウィンチェスターとイーストミッドランド北方の一部)が立地条件の良いことや、エンマに息子が生まれた場合の王位の保証等の交渉がうまくいったので1002年にエンマを英国に渡らせた。エンマのほうはコタンタンの土地や金の刺繍のある絹物を詰めたチェスト、金銀の馬具をつけた馬などを持参金がわりにしたという。⁽⁷⁾

エンマはノルマン公リチャール1世の9人の子供のうち上から2番目の子として990年頃生まれたとされている。⁽⁸⁾ リチャール1世はその昔セーヌ河をさかのぼってフランス北部を荒らし、フランス王からノルマン地方を与えられたロロ(在位911-31)から数えて3代目のノルマン公である。エンマの母はグノールといってデー人の子孫であったが、学問に熱心な

人であったという。⁽⁹⁾ エンマは従って北フランス語であるノルマン語とデーン語そして後に英語も話すようになった。エンマの結婚当時はその5年前に家督を継いだリチャード2世も含めて兄弟姉妹は皆独身だったが、のちに妹の1人はレンヌ伯と、もう1人はシャルトル伯という風にフランス国内で結婚している。少しのちのノルマン王朝の時代さえ、長男にはフランスの領地を、次男には英国の領地を与えてフランスを優先したノルマン貴族が多かったというのであるから、年端のゆかぬエンマを英国に渡らせた実家は不安であったろう。事実エンマはのちに危機に際してノルマンディーの庇護を何度か求めることになる。

エンマはエーゼルレッドの妻として14年間過ごしたが、それはあまり平穏な日々ではなかった。エルフイフ (Aelfgifu) という英国式の名前を与えられたが、これは聖なる始祖 (saintly ancestress) という意味で高貴な女性にしばしば与えられる名であった。エーゼルレッドの先妻も同名で呼ばれていたし、エンマの第2の夫であるカヌートの先妻も同名で呼ばれている。エンマの公式の地位も記録では *conlaterana regis* (she who is at the king's side) とのみ書かれているという。⁽¹⁰⁾ エーゼルレッドとの間には後の懺悔王エドワードと弟アルフレッドが生まれたが、前者の生年は1002年から1005年、後者の生年は1013年位といわれて定かではない。他に生年は定かではないが、ゴドギヴという娘があって彼女はフランスのマント伯ドレゴ、後にブローニュ伯ユースタスと結婚した。

エーゼルレッドとエンマの結婚生活を特に危うくしたものにデーン人虐待事件がある。彼はこの結婚前即ち996年にはデーン人に対しての警備法を発布したり、ロチェスターの寺院に土地を与えたりして善政に努めていたが、無能といわれた側近のレオフシーエの助言をいれて次第にデーン人への反感を強めていった。そして、ノルマン公国のエンマと結婚したのを機に同年11月、英国のデーン人虐殺の指令を出したのである。虐殺は恣意的なものといわれ、例えばデーン人の王族で英国に定住していたグンヒルドの目の前でその英国人の夫と息子を殺させ、グンヒルドをも謀殺した。グ

ンヒルドはそれまで度々英国を襲ってきていたデーン人の王スヴェンの血縁であった。⁽¹¹⁾ スヴェンの来襲は復讐を伴って非常に頻繁で過酷なものとなった。特に1003年から4年間、1009年から4年間はひどかった。⁽¹²⁾ デーン人への平和金は前述のように膨れ上がった。1013年にスヴェンが英国を制覇するとエンマはノルマン公国の兄のもとに身を寄せざる得なかった。2人の息子も後を追ひ、エーゼルレッド自身も海外へ逃亡した。

翌1014年初めにスヴェンは落馬して死んだが、英国に戻ったエーゼルレッドはスヴェンの息子カヌートをリンゼー地方から追い出すのが精一杯であった。エーゼルレッドの先妻の息子たちのうち長男のエドウィーはカヌートの手下に殺され、次男もスヴェンの死と殆ど同時に死んだ。そして、3男のエドマンドだけがカヌートと戦うことになった。エーゼルレッドは1016年春に病死するが、エドマンドに対して感謝したという記録はない。エドマンドが父であるエーゼルレッドの敵の未亡人と結婚したことが影響したのであろうか。

カヌートに対して病弱な父の代わりに5回も激しい戦いを続けたエドマンドは父が没するとロンドン市民の支援によって王となったが、デーン人支配地域ではこれを認めず、カヌートを王に選出した。エドマンドは「剛勇王」といわれて人気があり、エンマも継息子である彼を支持してカヌートと交渉したといわれる。しかしエドマンドは同年11月に不審死を遂げてしまう。後には同名の息子とエドワードという息子が残されていたが、追放され、英国王位を継いだのはカヌートであった。先々代の王エーゼルレッドとエンマの間の息子エドワードとアルフレッドはまだ大陸に亡命していた。生年を1005年とすればエドワードはこの頃まだ11-12歳だったということになる。エドワードとアルフレッドの運命はどのようなのであろうか。エンマは2人を今後どのように庇護していくのであろうか。

実はカヌートはエンマと翌1017年に再婚したのである。敵将の未亡人を娶るということは当時のデーン人の中ではあり得たことで、例えばカヌートの父スヴェンはスウェーデン王オラフの父の未亡人と再婚している。⁽¹³⁾

加えてエンマは「ノルマンの宝石」といわれた美人であった。⁽¹⁴⁾ 22歳のカヌートと30歳にさしかかろうとするエンマの結婚は、冒頭に述べた11歳も年若いヘンリー2世と再婚した元フランス王妃アリエノールを想起させる。しかしカヌートの場合にはすでに彼の方にも息子たちがあった。これまたエルファイフという名の女性との間にハロルドとスウェインがあったのである。それでエンマはもし自分がカヌートと結婚するなら自分との間に出来た息子が英国王になるということを条件に結婚を承諾したといわれる。

カヌートの善政については良く知られたことであるが、その最大の功績は何と言ってもデン人と英国人を政治上、聖職禄上平等に扱い、1035年に死ぬまで18年間も英国に平和をもたらしたことであろう。⁽¹⁵⁾ カヌートは20歳になる前からキリスト教に帰依していて、32歳頃にはローマにも巡礼にいった。故国デンマークにも何度も出かけて1028年からは兄ハロルド王に代ってノルウェーとデンマークの王も兼ねたが、1030年には自分と先妻の間の子スウェインをノルウェー王に、エンマとの間の子ハーディカヌートをデンマークの支配者にさせている。また、彼はノルマンディーの北欧に対する重要性をよく認識して、ノルマン公との関係も良好に保ったし、フランス最強のアキテーヌ公国のギヨーム5世とも同盟を結んで、自分の支配地の安泰をはかった。

カヌートは結婚生活においてもエンマを尊重し、寺院の寄進の際など彼女を大司教たちと共に出席させた。特に1023年にはロンドンからカンタベリーに行くアルフヘア大司教の行列でエンマが重要な役割を果たしたという記録がある。⁽¹⁶⁾ カヌートとエンマの間には上述のハーディカヌートの他に少なくともグンヒルドがいる。彼女はドイツのコンラート2世の息子ヘンリーの妻となった。⁽¹⁷⁾

1035年にカヌートがシャフツベリーで死んだ時、次の英国王となる可能性のある男子は5人いた。先妻との間の長男スウェイン、次男ハロルド、エンマとの間の長男ハーディカヌート、そしてエンマと先々代の王エーゼルレッドとの間の長男エドワードと次男アルフレッドである。(カヌート即

位の直前に短期間王となったエドマンド剛勇王の2人の息子は前述のように追放され、スウェーデンからさらにハンガリーまでいっていたのでロンドンの貴族たちの会議で正式に廃嫡にされていた。)エンマとしては先夫のほうの子はさておき、カヌートとの間のハーディカヌートを英国王にしたいところであった。

当時の英国王は貴族たちの集会によって承認を得なければならず、オクスフォードで激論がかわされた末、ハロルドが英国の大部分の地方(ノーサンブリアとマーシア)の王となり、ハーディカヌートがウェセックスの王となる合意が成立した。しかしハーディカヌートがデンマークの支配に戻った留守にハロルドが全英国の王となってしまった。彼は王になった時代(1035-40年)に義母エンマに大変辛くあたっている。「アングロ・サクソン年代記」のD写本の1035年の記述は、

Harold... let nyman of hire ealle *tha* betstan gaersaman *the* Cnut cyng ahte. & heo saet *theah* forth *thær* binnan *tha* while *the* heo moste

“ハロルドは彼女(エンマ)から王カヌートの所有していた最良の財宝を奪わせた。それでもなおかつ彼女はそこ(ウィンチェスター)に来るだけ滞在し続けた”(18)

と述べている。このことがあって2年後にはエンマは厳冬の海を越えてブルージュへ逃亡せざるを得なくなった。

1040年にハロルドが死んでようやく約束通り、ハーディカヌートの出番がまわってきた。英国王となった彼は、国民に重税を課し、「誓いを破る王」として悪名を馳せたが、在位2年にして、ある結婚披露宴の際発作を起こして死んでしまった。20代前半でまだ子供はなかった。

ハーディカヌートの死後、王位はエンマとエーゼルレッドとの間の長男エドワードが継いだ。彼の生年については前述した。彼はオクスフォードシ

ヤーのイスリップで生まれたが、亡命してノルマンディーで教育を受け、帰国して王位を継いだ時には30代後半になっていたのである。若いのに病弱で、ヒバードはこの人物を次のように評している。

the white-skinned, white-haired Edward known because of his piety as “the Confessor”... who seemed more concerned with the building of a great abbey at Westminster than with affairs of state.

“懺悔王としての敬虔さで知られる色白で白髪の王で国事よりもウェストミンスター寺院の建立に関心をもっていた。”⁽¹⁹⁾

そのウェストミンスター寺院は1065年に完成し、彼はそこに葬られた最初の王であるが、その治世は意外と長く、ウィリアム1世による征服まで23年間にも及ぶのである。

即位当時のエドワードと実母エンマの関係は必ずしも良くなかった。エドワードを1041年に英国に呼び戻したのは英国王となっていた異父弟のハーディカヌートであった。エンマがカヌートと再婚した時、カヌートと先妻の間の子供たちではなく、自分とカヌートとの間の子供が優先して王位継承する約束を迫ったことは前に述べた。その約束はエンマと先夫の間の子であるエドワードとアルフレッドの王位継承を全く配慮していなかったので、エドワードが母に冷たい感情を抱くのも無理はなかったのである。⁽²⁰⁾ エドワードにしてみれば、カヌートの死の直後の王位継承ではカヌートの先妻の子ハロルドに先を越され、ハロルドの死後はハーディカヌートに王位を奪われてしまっていたのである。その上、エンマにはノルウェー王、マグヌスの英国襲撃の資金援助の疑いがかけられていたので、英国王となったばかりのエドワードには迷惑であったし、エンマと宮廷付き司祭スティガンドとの仲の噂も彼を悩ますものであった。⁽²¹⁾

当時英国にはデン人人の残存勢力とエドワードのひきつれてきたノルマン人たち、そしてウェセックス伯に代表される英国の土着勢という3つの

勢力が伸張を求めて渦巻いていた。エドワード新王としては英国勢と組むことが緊急の課題で事実彼は即位後すぐにウェセックス伯ゴドウィンゴドウィンの娘エディスと結婚している。その兄のハロルドがエドワードの死後推挙されて英国王となったわけである。エディスの実家はエンマを北欧と結ぶ勢力の一翼を担うものとして警戒していた。

しかしながら、それまでの間、ということは20年余りのエドワード在位中、ずっとゴドウィン家が権勢を誇ったということではない。エドワード王の妹の夫でブローニウ伯ユースタスのドーヴァーにおける所業の後始末をゴドウィン父子に押しつけたりしたことから、一時ゴドウィン家との関係が険悪になって、エドワード王は妻のエディスの財宝を奪って尼僧院に送ったりしたこともあった。

エドワード王はノルマン人の側近に対しても態度が安定せず、ユミエールの司祭になったロベールやドチェスター教区をもらったウルフなどは1052年にゴドウィンが復権した時には王からの助けがなく逃亡せざるを得なかった。このような王の弱い性格は、例えばエーゼルレッド王が施行した悪名高いデーゲルドを廃止した理由として、自分の財宝の上に悪魔が居る夢を見たから、と言ったという故事にもあらわれている。⁽²²⁾

このようなやや気まぐれともみえるエドワード王の態度は母エンマに対して既述のようにやや冷たいものであった。先に引用した年代記(C写本：1043年)はその事実を次のように記述している。

ra the thaes se cing let geridan ealle tha land the his modor ahte him to handa. & nam of hire eall that heo ahte. on golde & on seolfre. & on unasecgendlicum thingum. for tham heo hit heold aer to faeste with hine.

“エドワード王は母が所有していた土地全部を自分の手に入るようにさせた。そして彼の母が所有していたもの全て金や銀やその他言いようもないほど多くのものを奪った。それというのも彼女が彼に対して

厳しかったからである。”⁽²³⁾

エドワード王は、しかし、その後しばらくして母との関係を改善し、母の司祭スティガンドのことも信頼するようになって、1052年後半にはゴドウィン父子に対する仲介を彼に頼んだりした。エンマはウィンチエスターに落ち着いて静かな余生を送るようになった。晩年のエンマにとっては、エドワード即位の17年前、即ち夫カヌートの死の直前に英国に居た自分を訪ねようとして、軍を率いて大陸から戻り、前述の英国勢の計略によって捕らえられ、盲目にされて傷病死させられた次男アルフレッドの哀れな最期だけが心残りだったに違いない。大陸に亡命していたエドワードとアルフレッドに宛てて帰国するように、と珍しく自筆の手紙を書いたとされるエンマのことを思うと、その手紙の信憑性の議論はともかく、子を思う母の温かさが感じられる。⁽²⁴⁾

エンマはエドワード即位10年後の1052年3月6日ウィンチエスターで亡くなり、その寺院でカヌートの隣に葬られた。当時生きていた唯一の息子であるエドワードはその後約14年生き、自分の建立させたウェストミンスター寺院に埋葬されたが、彼には跡継ぎがいなかった。エンマの死亡時には彼女の血脈が英国王の家系に残ることは予測しにくかったといえよう。⁽²⁵⁾

しかし、運命とは不思議なものである。エンマの王妃としての地位はのちに重大な意味を帯びてくるのである。エドワード懺悔王の死後、ゴドウィン家のハロルドが推挙されて即位して1年も経たない1066年10月、ノルマン公となっていたウィリアムが英国に攻めてきて、初のノルマン系の王朝を英国に樹立した。ウィリアム1世の英国征服の主な根拠は、彼が英国王妃エンマの兄の孫であったことにあった。勿論ローマ法王の支援、ハロルドがドーヴァー海峡で遭難した時ウィリアムに助けられたこと、デーン人がまたもや英国の北方に出現してハロルドの力を削いだことなどノルマン征服の成功については様々な要因があるが、ウィリアムの英国王位継承

に正当性を与えたのはエンマの血脈ということなのであるから、エンマの存在意義は大きい。王族の女性はアングロ・サクソンの社会で *freoth webbe* “peace weaver” といわれていた、とB. ミッチェルはいつているが、⁽²⁶⁾ エンマは英国とノルマンの2大国の「くさび」の役割をよく果たしたといえるであろう。王妃エンマを巡っては5人もの英国王即ち、エゼルレッド、カヌート、ハーディカヌート、エドワード、そしてウィリアムが伴侶として、母として、または血縁として関わっているのであるから「くさび」の意味も重いのである。

注

- 1 古英名の日本語の読み方は種々あるが、本稿ではエンマ (Emma) 以外は (青山：エマ) 青山吉信編「イギリス史」(山川出版社 1995年) 中の人名索引の読み方を採用した。
- 2 石井美樹子著「王妃エレアノール」 平凡社 1988年。
- 3 *Gesta Regum* sec. 164, *The Dictionary of National Biography* (= *DNB*), Oxford University Press, 1973, s.v. *Aethelred* (本稿中 *ash* の文字は *ae* で代用してある。)
- 4 「同所」
- 5 他に名前のわかっている子供はエグバート、エドレード、エドワード、ウルフヒルド、アルフギヴ。
- 6 Pauline Stafford, *Queen Emma and Queen Edith*, Blackwell, 1997, pp. 215-6.
- 7 「上掲書」p.224. なお、このエンマの結婚支度はエゼルレッドの大叔父にあたるアゼルスタン王 (在位925-40) の妹に対してフランク公ヒューが迎えの使いを出した際の贈り物と比較してみると面白い。ホワイトロックはそれらを香水、宝石、特にエメラルド、オニックスの花瓶、黄金の皿としている。
Dorothy Whitelock, *The Beginnings of English Society*, Penguin

Books, 1991, p.61.

- 8 エンマの生年ははっきりしないが、彼女が生んだ最後の子の生年が1023年なので、常識的に考えてその時彼女は40歳以下であったろう、と推定する。仮に30代前半だったとすると990年頃の出生となるが、1002年の結婚では随分幼い妻となる。
- 9 Stafford, p.212.
- 10 Stafford, p.224.
- 11 John Burke, *An Illustrated History of England*, William Collins and Sons, Co., 1987, p.32.
- 12 大野真弓編「イギリス史」世界各国史1、山川出版社、1996年、52-3頁。
- 13 Stafford, p.226.
- 14 “gem of the Normans” Henry of Huntingdon, p.752, *DNB* s.v. Emma の *DNB* Canute の項にもエンマは “remarkably beautiful” とある。
- 15 Christopher Hibbert, *The Story of England*, Phaidon Press, 1997 p. 37.
- 16 Stafford, p.233.
- 17 Stafford, p.245.
- 18 Charles Plummer and John Earle, *Two of the Saxon Chronicles*, Vol. 1, p.159. (本稿中 thorn と eth の文字は *th* で代用してある。) 本稿の和訳と括弧内の補足は本稿著者による。
- 19 Hibbert, p.37.
- 20 *DNB* s.v. Aelfred, aetheling (d. 1039).
- 21 Stafford, pp.247-52.
- 22 *DNB* s.v. Edward (d. 1066).
- 23 Plummer, p.162.
- 24 Stafford, p.243.

- 25 カヌートとの間にグンヒルド、エゼルレッドとの間にゴドギヴという娘があり、それぞれ子孫を残したが、女系であり、英国の王位継承の対象ではなかった。
- 26 Bruce Mitchell, *An Invitation to Old English and Anglo-Saxon England*, Blackwell, 1966, p.210.